

『四卷楞伽』と『楞伽經』 ——「求那跋陀羅訳」の特徴——

堀 内 俊 郎

はじめに

『楞伽經』の求那跋陀羅（グナバドラ、以下、求と略す）訳である『楞伽阿跋多羅宝經』（『四卷楞伽』、宋訳）には特徴や問題点もある。宋訳のわかりにくさの原因は、一つには、特徴的な訳語を用いている点が挙げられる。たとえば、svacitta-drśyamātra を「自心現量」、nirābhāsa を「無所有」と訳すなどである。ところで、求の訳書としては、『四卷楞伽』の他に『勝鬘經』『解深密經』『雜阿含經』の訳があるが、それらにも目を向けると、独特の訳語とみえるものが、実はそれらにも一貫して用いられていることが知られる。本稿では、求による訳語のいくつかについて、『四卷楞伽』とその 3 書とを比較し、さらには他の漢訳者による同じ語の漢訳と比較する。それにより、求の訳語と、『四卷楞伽』を中心とした『楞伽經』諸漢訳の特徴を指摘したい¹⁾。

以下では、順に、鬘、解、雜について、まず求の訳語を「求」として挙げ、さらに、「;」のあとに、他の漢訳者の訳語を挙げる。次の行では、楞の諸漢訳を挙げる。その際、「=」は、求訳とイコール。「×」は、その訳語を欠いていることを表す。なお、楞のロケーション（大正蔵の頁番号）は、宋訳についてのみ提示する。他 2 訳については、高崎 1980 所収の対照表により辿られたい。

1. 『勝鬘經』

1) 大乘と摩訶衍：求訳の鬘・楞で、mahāyāna という語が違った意味で使われている場合、「大乘」と「摩訶衍」と訳し分けられている例がある。その場合、文脈的に、「摩訶衍」の方がより根源的なものを指している。以下では、生み出すものとしての「摂受正法」=mahāyāna が、「摩訶衍」とされている²⁾。他方、鬘の菩訳は「大乘」とのみしており、訳し分けない。

鬘：求：218b（月輪 p.41ff.）：以人天善根而成熟之。求声聞者授声聞乘。求縁覚者授縁覚

乗。求大乘者授以大乘。是名攝受正法善男子善女人建立大地堪能荷負四種重任。

219b (月輪 p.67): 世尊。攝受正法者是摩訶衍。何以故。摩訶衍者。出生一切声聞緣覺世間出世間善法。世尊。如阿耨大池出八大河。如是摩訶衍…

次に、以下の楞（偈文）では、我が乗は「大乘」に非ずとされたあと、然るに乗は「摩訶衍」なりと説かれる。原語は同じく mahāyāna である。

楞：求 (498a)³⁾：非我乘大乘 非説亦非字 …// 然乘摩訶衍 三摩提自在 …//

さて、この2偈 (pāda cd は中略) の意味であるが、智金剛 (Jñānagarbha) の注釈 (デルゲ版 No. 4019) は、「二諦に関して知られるべきである」(D pi 188a5) という。一偈目が世俗諦で、言葉によって表された限りでの大乘、二偈目が勝義諦で、離言、自内証の境地としての大乘ということであろう。菩・実は求に従う。

2) *ābhiprāyika, sāvāśeṣa (/sottara?), neyārtha, dgongs pa can dang/ lhag ma dang bcas pa dang/ drang ba'i don (月輪 p.79): 求：方便・有余・不了義説；菩：随他意語・不了義説

これは阿羅漢や独覺のさとりにについての記述であり、如来の獅子吼が「了義 (*nītārtha)」とされる (月輪 p.105) のと対比される。他方、解においても、よく知られた三転法輪の第二法輪についての記述中に、以下のような似た句が見られる。

*sottara, sāvakāśa, neyārtha, bla na mchis pa, skabs mchis pa, drang ba'i don (SNS, VIII.30)

ところで、求の翻訳として、『第一義五相略』というものがあつたが散佚したとされていた。だが、高橋 2014 は、吉蔵が『法華玄論』(大正 No.1720, 34 卷) に引用する似た名前の『五相略経』という著作——これは内容的にみて『解深密経』の異訳とは指摘されていたのだが——こそが、この求訳の『第一義五相略』に相当するのではないかと論じた。吉蔵による引用文は短いものであるが、ここではさらに、この中に、少なくとも他の訳と比較して求に特徴的といつてよい訳語(「有余・不了義説」, 「離自性」)が見られることを指摘しておきたい。

『法華玄論』大正 34.384a: 又『五相略経』明教有三種。第一鹿野為声聞説四諦。第二為大根説諸法離自性不生不滅。此亦 (1) 有上・有余・不了義説。起諍論處。第三為求一切乗者。説諸法 (2) 離自性不生不滅。無上無余非諍論處。

(1) *sottara, sāvakāśa, neyārtha: 『五相略経』: 有上・有余・不了義説；菩 (解): (希有之中復是希有)；玄 (解): 有上・有容 (／有所受容)・猶未了義

まずここで、「有余・不了義説」という二語が、鬘の求訳と『五相略経』で共通して用いられていることが注意される。ただ、鬘の二番目の句は lhag ma dang bcas pa で恐らく *sāvāśeṣa (もしくは sottara?) が想定されるのに対し、解では skabs

(162)

『四卷楞伽』と『楞伽經』(堀 内)

mchis pa で *sāvakāśa が想定されてきたのではあるが、同じ訳者が文脈的に類似する箇所を訳すに際し前の翻訳例を踏襲した可能性も考えられるし、この二語は少なくとも鬘の菩訖、解の玄訖とも異なることは確かである。

(2) *niḥsvabhāva: 『五相略經』: 離自性; 『相續解脫經』: =; 菩 (解): 無有体相 / 無体相; 玄 (解): 無自性

楞: ①求: = (483c); 菩: =; 実: 無自性 ②求: = (488bff. (複数)); 菩: 離自体 (/ 無体); 実: 無自性 ③求: = (489b); 菩: ×; 実: × ④求: = (494c (偈中)); 菩: 無有体相; 実: 無自性

*niḥsvabhāva という語を「離自性」と訳すことは他の漢訳文献にもしばしば見られるが、関連文献の範囲内ではかえって特徴的である。すなわち、この語を、求は、解・楞ともににおいて一貫して「離自性」と訳す。これは『五相略經』と共通しており、玄の「無自性」と相違する。楞では、実は「無自性」で一貫している。他方、菩では、「無有体相」が解・楞ともに共通するが、「離自性」を踏襲するなど定まっておらず、ブレがある。

2. 『解深密經』

1) *dauṣṭhulya:

解: 求: 過 / 過惡 (715b/719c); 菩: 障対 / 煩惱 (680c/687b); 玄: 麤重 (704b, 710b)

楞: a. 過惡⁴⁾: anādikāladauṣṭhulyavikalpaprapañcavāsanāvāsita: 求: 無始過惡虛偽習氣所熏 (509b); 菩: 無始世來 (身口及意) 妄想煩惱戲論熏習; 実: 無始來過惡熏習 (なお, 512a でも, 求: 過惡; 菩: 煩惱; 実: 過) b. 過⁵⁾: anādikālaprapañcadauṣṭhulyarūpavāsanābhīniveśa: 求: 無始虛偽過色習氣計著 (484a); 菩: 無始世來虛妄分別色境界熏習執著戲論; 実: 無始時來取著於色虛妄習氣 (なお, 483c-484a でも, 求: 過; 菩: 虛妄分別; 実: ×) dauṣṭhulyadoṣa: 求: 過 (493c (38 段)); 菩: 煩惱過 / 諸過; 実: [諸] 過惡 svavikalpadauṣṭhulyavāsanā: 求: 自妄想過習氣 (493c); 菩: 自心分別煩惱; 実: 自分別過習 dauṣṭhulyavikalpābhīniveśavāk: 求: 過妄想計著言說 (490b); 菩: 執著 (/ 妄執) 言說; 実: 計著過惡言說 c. 過患 (svacittadṛśyadauṣṭhulyavāsanā): 求: 自心現習氣過患 (486a); 菩: 自心煩惱見熏習氣過患; 実: 自心過習 d. 惡: anādikālavividhaprapañcadauṣṭhulyavāsanāvāsita: 求: 無始虛偽惡習所熏 (510b); 菩: 無始世來虛妄執著種種戲論諸熏習; 実: 無始虛偽惡習所熏 (なお, 503c でも, 求: 諸惡; 菩: 煩惱; 実: 諸惡) e. 惡邪 (anādikālaprapañcadauṣṭhulyasvaprativikalpanā): 求: 無始虛偽惡邪妄想 (503a); 菩: 無始身戲論煩惱分別煩惱; 実: 無始虛偽惡邪分別 f.

× (anādikālaprapañcādauṣṭhulyavāsanā): 求: 無始妄想熏 (483a); 菩: 無始來戲論熏習; 実: 無始戲論虚妄習氣

さて, dauṣṭhulya に対する求の訳語としては, 「過惡」, 「過」, 「過患」, 「惡」, 「惡邪」があり, 「過」あるいは「惡」を必ず用いているようである。実は求を踏襲することが多い。他方, 菩は解でも「煩惱」と訳しており, 楞においても数箇所で見られるものの, 「虚妄分別」等の訳語も見られ, また, c, e では混乱した訳語となっている。

2) *samāropa/apavāda:

解: 求: 建立・謗／誹謗 (717a, 718a); 菩: 有・無誹 (683b, ×) 玄: 增益・損減 (706c, 708a)

楞: ①求: 建立⁶⁾・誹謗 (488a); 菩: 有・無誹／断・常 (偈中)／建立・誹; 実: = ②求: = (491a); 菩: =; 実: × ③求: = (492a); 菩: 建立・×; 実: = ④求: = (497a (偈中)); 菩: 有・誹無; 実: = ⑤求: = (500c); 菩: 有・無; 実: = ⑥求: = (511a); 菩: 有・無; 実: 益・損

求は「建立・誹謗」で一貫しており, 実にはほぼそれを踏襲しているが, 「益・損」と, 「增益・損減」から一語を拝借した形で訳す例もある。菩は「有・無誹」が楞・解で一貫するが, 「有・無」はミスリーディングといってよかろう。

3) *āśrayaparāvṛtti:

解: 求: 身転 (718b); 菩: 轉身 (685a); 玄: 転依 (708b)

楞: a. 身転: 求: = (512a); 菩: 廻転; 実: 転依 (なお, 512c でも, 求: =; 菩: 轉身; 実: 転淨所依) b. 身転変: 求: = (500b); 菩: 転; 実: 転, (Cf. cittāśrayaparāvṛttasya: 求: 身心転変⁷⁾ (497c); 菩: =; 実: 心転所依) c. 身随転変 (āśrayasya parāvṛtti): 求: = (507c); 菩: 轉身 (依正相); 実: 如是転所依 d. 轉身 (parāvṛttāśraya): 求: = (483c); 菩: =; 実: 転依

3. 『雜阿含經』

1) *abhisamaya: 『雜阿含經』, 楞の求訳は, *abhisamaya (現觀) を, 共に「無間等」と訳す。これについてはすでに榎本 1982: 56 (註7) に, 「無間等は, 『雜阿』の翻訳にも関与した宝雲に特有の Skt. abhisamaya の訳語であろうか」とあり, 『雜阿毘曇心論』, 宋訳『楞伽經』を指示している (『雜阿含經』287 經等, 『四卷楞伽』では 498a 等)。ここでは, 『四卷楞伽』では「無間」の形もある (501b, 487a, 489b⁸⁾, 510a) が, それも「等」が落ちた形であろうと指摘しておきたい。

おわりに

以上、求訳に特徴的な訳語をいくつか列挙し、他の漢訳と比較した。『楞伽經』諸漢訳については Takasaki 1981: (4) による「魏訳は多くの場合恣意的な意識が多く、唐訳は大事なところで宋訳を踏襲している場合があって、訳者の自負するほどには、梵本の理解に訳立たない」という評があるが、今回の用例検討の結果、別の観点からいえば、まず『四卷楞伽』（求訳）についていえば、同じ經典中で、しかも、同じ段落・文脈の中で、違った梵本を同じ漢語で訳すというのは不備であろう。ただ、求訳は、術語の翻訳についていえば、他の二訳よりも意識的に注意して訳しており、それは他の求による訳書でもかなり一貫している。他方、実訳は、無批判に先行する求訳を踏襲していることも多いものの、さすがに訳語が定着しているといえる。菩訳は術語の翻訳に意識的ではなく⁹⁾、不適切といえるものも多い。以上は梵本原本からの翻訳文献として比較検討した限りでの各訳の特色である。

-
- 1) なお、ここで二点注意しておきたい。一点目は、ここで「特徴的」というのは、求にのみ特有の、ということではなく、他の翻訳者も使用している例も多くあるということである。ただ、本稿での対照により、その特徴的という意味は明らかとなろう。もう一点目は、求は梵本原典を唱えたに過ぎず翻訳（漢語への置き換え）を行ったのは多くの場合、宝雲であるとされることである（榎本 2001 等）。ゆえに、正確に言えば宝雲の訳語の特徴ということであろうが、本稿では慣例に従い「求訳」とする。ただ、日本印度学仏教学会学術大会発表時、榎本文雄教授より、求訳ではなくとも宝雲が携わった翻訳についてはどうかという点と、榎本 1982 をご指示いただいた。記して謝意を示すとともに、今後の課題としたい。
 - 2) この箇所については松本 1983: (47) が、「求那跋陀羅は、記述〔3〕冒頭の「大乘」(mahāyāna) という二つの語を、「大乘」と意識せずに「摩訶衍」と音写しているのである。そこには、super-locus としての「大乘」と locus としての「摩訶衍」を区別しようとする意識」「が働いていたのではないかと思われる」と適切に指摘している。また、松本 2004: 478ff.
 - 3) なお、求訳は mahāyāna を訳す際には主に「大乘」を用いるが、「摩訶衍」と訳している例もある。ただし、そこでは「大乘」との対比はない (502b, 511b)。なおまた、別の箇所 (508b) では、一乗 = 大乘であると説かれるが、その場合は「大乘」とは訳されており、そもそも梵本には「八聖道」とある。菩は「八聖道」、実は「八支道」。
 - 4) ただし、この「過惡」は、512c・513a (85 段 (偈中)・86 段) では doṣa の訳。『勝鬘經』でも然り (*doṣa, skyon (月輪 p.9, p.105): 求: 過惡; 菩: 過惡/過)。
 - 5) ただし、この「過」は、512a (82 段 (偈中)) では doṣa の訳。

- 6) ただし, これは $vyava\sqrt{sthā}$ や $prati\sqrt{sthā}$ や $adhi\sqrt{sthā}$ などの訳語でもある. 特に, $samāropa$ を「建立」と訳したその次の文で, $vyavasthita$ を「建立」と訳している例もあり (500c), このような事例は求訳の不備と言わざるをえない.
- 7) 諸本に異読はないものの, 「転依」に対する求訳の訳例 (「身転」「身転変」) からすれば, 「心身転変」とあるべきで, 「心, 身転変す」と読むべきであろう.
- 8) Cf. 高崎 1980: 237.
- 9) 菩訳の「欠陥」については大竹 2005: 30ff. 参照.

〈略号〉

楞: 『楞伽經』(大正蔵 16 卷, 梵本は Nanjio, Bunyiu, ed., *Laṅkāvatārasūtra*, Kyoto, 1923 (Nj) による): 求: 求那跋陀羅訳 (443 年); 菩: 菩提流支訳; 実: 実叉難陀訳 鬘: 『勝鬘經』: 求: 『勝鬘師子吼一乘大方廣方便經』(求那跋陀羅訳 (436 年)); 菩 (唐): 菩提流支訳 (710 年) (「月輪」として指示, 月輪 1940 参照) 解: 『解深密經』(大正蔵 16 卷, チベット語訳は Étienne Lamotte, ed., *Samdhinirmocanasūtra*, Paris, 1935 (SNS) による): 求: 『相續解脫經』 (= 『相續解脫地波羅蜜了義經』, 『相續解脫如來所作隨順處了義經』) (求那跋陀羅訳); 菩: 『深密解脫經』(菩提流支訳, 514 年); 玄: 『解深密經』(玄奘訳, 647 年) 雜: 『雜阿含經』(大正蔵 2 卷): 求那跋陀羅訳, 435–436 年.

〈参考文献〉

Takasaki 1981: Takasaki Jikido, *A Revised Edition of the Laṅkāvatāra-Sūtra Kṣanika-Parivarta*, Tokyo. 榎本文雄 1982 「『撰大乘論』無性釈に引用される若干の經文をめぐって——『城邑經』の展開を中心に——」『仏教史学研究』24-2, 44–57. 榎本文雄 2001 「『雜阿含』の訳出と原典の由来」『仏教文化の基調と展開——石上善応教授古稀記念論文集』1, (31)–(41), 山喜房仏書林. 大竹晋 2005 『新国訳大蔵經 十地經論』大蔵出版. 高崎直道 1980 『楞伽經』仏典講座, 大蔵出版. 高橋晃一 2014 「求那跋陀羅訳『相續解脫經』と『第一義五相略』」『東方学』127, 18–34. 月輪賢隆 1940 『藏・漢・和三譯合璧勝鬘經・寶月童子所問經』寶幢會編, 興教書院. 松本史朗 1983 「『勝鬘經』の一乘思想について 一乘思想の研究 (III)」『駒澤大学仏教学部研究紀要』41, (37)–(64). 松本史朗 2004 『仏教思想論』下, 大蔵出版.

〈キーワード〉 『楞伽經』, 求那跋陀羅, 宝雲, 『勝鬘經』, 『解深密經』, 『雜阿含』

(東洋大学国際哲学研究センター研究助手, 博士 (文学))